

海 浜 青 年 の 家

第 1 節 概 要

福島県海浜青年の家は、めぐまれた自然環境のなかで、青少年たちの集団宿泊研修活動をととして、規律・協同・友愛奉仕の精神を体験的に会得させ、心身ともに健全な青少年を育成することを目的とし、昭和50年5月に開設された県の社会教育施設である。

当所のめざす教育目標は次のとおりである。

- 規則を守り、規律ある生活態度を養う。
- 相互連帯意識を高め、協同の精神を養う。
- 人格を尊重し合い、友愛の精神を養う。
- 勤労と責任を重んじ、進んで奉仕する態度を養う。
- 心身をきたえ、自己を高めようとする態度を養う。

1 役員及び職員組織

(1) 理事・監事

役 職	氏 名	所 属
理 事 長	佐藤 昌志	福島県教育委員会教育長
副 理 事 長	酒井 信人	福島県海浜青年の家所長
常 務 理 事	丹治 成男	福島県海浜青年の家次長
理 事	早川 俊一	福島県教育庁教育次長
理 事	今野 繁	相馬市長
理 事	鈴木 完一	福島県社会教育委員の会議議長
理 事	太田 緑子	福島県青少年教育振興会長
理 事	塚本 利勝	福島県教育庁社会教育課長
監 事	近藤 三男	福島県総務部財政課長
監 事	佐藤 吉一	福島県教育庁財務課長

(2) 職員組織

職 員	所 長	次 庶 務 長 兼 課 長	指 導 課 長	主 事	指 導 主 事	保 健 技 師	運 兼 用 務 手 員	計
数	1	1	1	1	4	1	1	10

(3) 運営委員

氏 名	所 属
◎阿 部 智 義	相馬市教育委員会教育長
○井 上 篁	福島県公民館連絡協議会
田 中 淳 一	福島県青少年婦人課長
金 田 浩 一	福島県教育庁社会教育課主幹

氏 名	所 属
福 羽 天 伯	福島県高等学校長協会代表
新 田 宣 雄	福島県小中養護学校長会代表
太 田 豊 秋	福島県青少年団体連絡協議会代表
只 野 裕 一	青年会議所代表
村 岡 まゆみ	相馬市青年協議会代表
酒 井 啓 雄	海浜青年の家友の会長

◎印 委員長 ○印 副委員長

2 昭和61年度重点目標と成果

(1) 青少年研修の充実

- 昭和61年度は、年間総延利用者数5万人を達成した。
この数は、開設して11年目、創立以来の最高年間利用者数を記録したことになる。定員200名(1日当り)の当所にとっては、最大利用の限界線に達した数である。
- 60年度にも約10%の延利用者数の伸びをみたが、それをなお更新して、61年度は4千人強の増加、今年度も約10%の増大を実現した。60年度と61年度の2年連続の伸長は、合わせて20%の利用拡大を実現した。
- 利用団体の数からみても、前年度250団体に対して61年度は266団体と10%の伸びをみせている。
学校教育団体で著しい増加は、大学生団体で60年度は7団体であったが、61年度は16団体と飛躍的(2.3倍)に伸長している。
- 幼稚園から婦人団体、各種運動の強化合宿から企業研修、合唱合奏、フォークダンスと研修のねらいも多彩である。開かれた「生涯教育学習の館」としての適切な対応は、社会教育団体の着実な伸びとして表れてきている。少年団体を除く社会教育団体は、60年度36団体に対して61年度は50団体と伸び、40%の利用増大をみている。
- 研修団体の自主、主体性を尊重し、研修のねらいが達成できるよう弾力的に指導援助してきたので、所期の目的を達成したとほとんどの団体は評価している。それに加えてもう少し長期宿泊をしたいという要望がみられた。3泊4日以上が、60年度は27団体に対し、61年度は35団体と30%ほど多くなっている。

(2) 主催事業

- 「集団宿泊指導担当者研修会」の参加者は、学校引率責任者が90%で、学校行事が周到にして計画的であることがうかがえた。
内容的には3日分の内容を1泊2日でこなすという、息もつかせぬハードスケジュールであるが、今年度の試行として就寝前の自由時間に、自由に話し合える茶話会風な懇親会を設定したところ、疲れているにもかかわらず真剣に研修プロや実施の要領について話し合っている姿は、予想以上の成功であった。